

コロナ禍での知育玩具インストラクターの家庭保育に関する調査・分析

○藤田 篤(日本知育玩具協会) 小川 直茂(岐阜市立女子短期大学)

1.はじめに

新型コロナウイルスの感染拡大は、感染への不安だけでなく、人同士の接触制限や外出制限など家庭生活の環境変化にも大きな影響を及ぼした。筆者が主催する幼児教室においても、多くの受講者が子育てに対するストレスを強く感じている様子が見受けられた。各種メディアの報道でも「親子での時間の使い方がわからない」などの声が子育て世代から挙げられていた。新型コロナウイルスの影響で、多くの母親が家庭保育(子育て)のあり様の変化に戸惑いや迷いを感じ、その結果精神的な不安を抱いているのではないかと推察される。

2.研究目的

筆者が代表理事を務める日本知育玩具協会では、インストラクター制度によるおもちゃの専門家育成に取り組んでいる。本制度は、おもちゃのメソッドを学ぶことで、「インストラクターが自身の子育てでもそれを役立て、家庭保育を充実させる」ことを目的の一つに定めている。

本研究では、新型コロナウイルスの影響で家庭保育のあり様が大きく変化した中で、日本知育玩具協会の取り組みがその目的を果たしているのかどうかを明らかにするため、インストラクターの子育てへの意識や実態を調査し、その内容を分析・考察する。

3.一次調査

まず、2020年4月～5月の緊急事態宣言時におけるインストラクターと一般家庭の家庭保育への意識を比較するため、アンケート調査を行った。2020年11月に、日本知育玩具協会のインストラクター31名、有限会社カルテットのフレンド会員に登録する50名を対象に調査を実施した。調査項目と回答結果は表1のとおりである。

結果を分析すると、インストラクター、フレンド会員ともに新型コロナウイルスで家庭保育の環境に影響があったこと、子どもとの触れ合い方に変化があったことが共通している。一方でQ2、Q4、Q7、Q11などのデータをみると、インストラクターの方が、子育てに対して前向きな気持ちを持っている様子が見えてくる。さらにQ8の結果からは、子どもとの触れ合い方の変化に対してインストラクターの方が柔軟に対応できていることがわかる。

4.二次調査

一次調査の結果を受け、インストラクターの家庭保育への意識や実態を詳細に把握するため、2020年12月に2名のインストラクターにインタビューを行った。A氏は2児(6歳女兒、3歳男児)の母親、B氏は1児(9歳女兒)の母親である。インタビュー内容は、前章のアンケ

表1.調査項目および回答結果

■調査項目

Q1	新型コロナの影響による生活環境の変化が、子育てへの意識に影響を与えたか 1. 影響あり 2. やや影響あり 3. どちらとも 4. あまり影響なし 5. 影響なし
Q2	新型コロナの影響下で、子育てに対して前向きな気持ちを持てたか 1. 前向き 2. やや前向き 3. どちらとも 4. やや後ろ向き 5. 後ろ向き
Q3	緊急事態宣言中、家庭で子どもとの触れ合い(遊びなど)の時間が増えたか 1. 増えた 2. やや増えた 3. 変わらない 4. やや減った 5. 減った
Q4	触れ合いの時間が増えたことをどう感じたか(Q3で1または2の回答者のみ) 1. 嬉しい 2. やや嬉しい 3. どちらとも 4. ややストレス 5. ストレス
Q5	緊急事態宣言中、家庭で子どもが一人で過ごす時間が増えたか 1. 増えた 2. やや増えた 3. 変わらない 4. やや減った 5. 減った
Q6	緊急事態宣言中、家庭で子どもとの触れ合いの内容に変化があったか 1. 変化あり 2. やや変化あり 3. どちらとも 4. あまり変化なし 5. 変化なし
Q7	緊急事態宣言中、子どもが家庭での触れ合いについて満足していたか 1. 満足 2. やや満足 3. どちらとも 4. あまり満足でない 5. 満足でない
Q8	緊急事態宣言中、家庭で子どもとの触れ合い方で困ったり悩んだりしたか 1. 困った 2. やや困った 3. どちらとも 4. あまり困らなかった 5. 困らなかった
Q9	緊急事態宣言中、家庭で子どもと触れ合う上で、おもちゃや絵本は足りていたか 1. 足りた 2. ある程度足りた 3. どちらとも 4. やや足りない 5. 足りない
Q10	緊急事態宣言中、家庭で映像メディアの利用頻度(学業関連を除く)は増えたか 1. とても増えた 2. 増えた 3. やや増えた 4. あまり増えない 5. 全く増えない
Q11	緊急事態宣言中、家庭で子どもとの触れ合いは充実していたと感じるか 1. 充実 2. やや充実 3. どちらとも 4. あまり充実していない 5. 充実していない

■回答結果

		1	2	3	4	5
Q1	インストラクター	35.5(11)	54.8(17)	3.2(1)	6.5(2)	0(0)
	フレンド会員	68.0(34)	26.0(13)	2.0(1)	4.0(2)	0(0)
Q2	インストラクター	35.5(11)	48.4(15)	6.5(2)	9.7(3)	0(0)
	フレンド会員	28.0(14)	30.0(15)	20.0(10)	16.0(8)	6.0(3)
Q3	インストラクター	71.0(22)	25.8(8)	3.2(1)	0(0)	0(0)
	フレンド会員	62.0(31)	16.0(8)	18.0(9)	4.0(2)	0(0)
Q4	インストラクター	70.0(21)	23.3(7)	6.7(2)	0(0)	0(0)
	フレンド会員	53.8(21)	23.1(9)	10.3(4)	10.3(4)	2.6(1)
Q5	インストラクター	9.7(3)	12.9(4)	61.3(19)	6.5(2)	9.7(3)
	フレンド会員	10.0(5)	14.0(7)	56.0(28)	6.0(3)	14.0(7)
Q6	インストラクター	25.8(8)	51.6(16)	6.5(2)	12.9(4)	3.2(1)
	フレンド会員	26.0(13)	52.0(26)	4.0(2)	18.0(9)	0(0)
Q7	インストラクター	35.5(11)	38.7(12)	25.8(8)	0(0)	0(0)
	フレンド会員	38.0(19)	38.0(19)	14.0(7)	10.0(5)	0(0)
Q8	インストラクター	6.5(2)	29.0(9)	0(0)	38.7(12)	25.8(8)
	フレンド会員	28.0(14)	26.0(13)	8.0(4)	24.0(12)	14.0(7)
Q9	インストラクター	32.3(10)	54.8(17)	3.2(1)	9.7(3)	0(0)
	フレンド会員	32.0(16)	46.0(23)	2.0(1)	16.0(8)	4.0(2)
Q10	インストラクター	0(0)	0(0)	22.6(7)	45.2(14)	32.3(10)
	フレンド会員	10.0(5)	26.0(13)	12.0(6)	22.0(11)	30.0(15)
Q11	インストラクター	45.2(14)	45.2(14)	9.7(3)	0(0)	0(0)
	フレンド会員	40.0(20)	34.0(17)	6.0(3)	20.0(10)	0(0)

単位: % (カッコ内の数値は回答者数)

※Q4はQ3で1または2の回答者を母数とした集計結果

ート調査のうちQ5を除く10項目、および講師としての学びや活動が家庭保育に与えた影響についてである。

4.1. A氏のインタビュー

Q1:「影響がなかった」と答えた。

Q2:「前向きな気持ちを持てた」と答え、その理由を「子どもと過ごす時間が増えたから」とコメントした。

Q3:「増えた」と答えた。

Q4:「嬉しく思った」と答えた。講師としての学びや活動がそう感じる気持ちに関係しているか?と尋ねたところ、「関係があると思う」と答えた。そう思う理由をさらに尋ねると「おもちゃというツールを使って、子どもと向き合う方法を知っているから」「おもちゃが家にある環境が、講師になることで整えられ、さらに子どもとの向き合い方を講座の中で学び、講師として活動することで学びを継続できているから」との回答を得た。

Q6:「変化はなかった」と答えた。

Q7:「満足していると思う」と答えた。理由を尋ねると「自粛期間中に子どもが退屈しているような姿が見られないから」との回答だった。そう感じた具体的なエピソードを尋ねたところ「一つの遊び(例えばごっこ遊び、汽車遊び、積木遊びなど)を何日も継続して遊んでいる姿が、自粛期間中に複数回見られたこと」と答えた。

Q8:「困ったり悩んだりしなかった」と答えた。

Q9:「足りていた」「親も子どもも退屈に感じることは全くなく、むしろ時間が足りないくらいだった」と答えた。

Q10:「まったく増えていない」と答えた。

Q11:「充実していたと感じる」と答えた。その理由を尋ねたところ、「一つの遊びに対して、普段より、これまでよりももっと時間をかけて、遊びの幅を深めていけた気がするから」との回答を得た。

最後に、講師としての学びや活動がコロナ禍における家庭保育にどう影響したか尋ねたところ、「講師活動を通じて自分の中でしっかり子どもとの向き合い方が確立していたので、特に迷うことなく、自然とその時間を過ごし、子どもと向き合うことができていると思う」と答えた。

4.2. B氏のインタビュー

Q1:「影響があった」と答えた上で、「わが子の気持ちとか、前向きな気持ちを閉ざさないようにしようと思った」とコメントした。

Q2:「前向きな気持ちを持てた」と答え、その理由を「子どもとの関係に不安がなかったから」とコメントした。

Q3:「増えた」と答えた。

Q4:「嬉しく思った」と答えた。講師としての学びや活動がそう感じる気持ちに関係しているか?と尋ねたところ、「関係があると思う」と答えた。そう思う理由をさらに尋ねると「日々、伝える側の講師として活動することで、自分が学んだことが定着していくと実感していた。子育てにおいて、こうすればいいんだ、ということが自分の中にあるという自信が持てたのが大きい」との回答を得た。

Q6:「子どもの遊び方に変化があった。じっくり遊びに取り組む余裕が持てているのだな、と感じた」と答えた。

Q7:「満足していた」と答えた。その理由を尋ねると「コロナ禍において、自分たち両親も常に家にいるので、一緒に遊ぼうよ、と誘う機会が増え、必然的に親子の遊び・触れ合いが増加したから」との回答だった。

Q8:「困ったり悩んだりしなかった」と答え、その理由として「絵本やおもちゃが充実していたから」とコメントした。

Q9:「足りていた」「役立ったし、心強かった」と答えた。

Q10:「まったく増えていない」と答えた。

Q11:「充実していたと感じる」と答えた。

最後に、講師としての学びや活動がコロナ禍における家庭保育にどう影響したか尋ねたところ、「おもちゃ遊びに関わるスキル(例えば積木遊びから玉の道遊びへの展開など)を持っていたので、子どもがこんな遊びをしてみようかと思った時、まず自分がやって見せることができ、結果的に遊びが広がって充実した。それができたのは、自分にスキルや学びが定着していたからで、教える側に立ったからこそ得られたことだと思う」と答えた。

4.3. 分析・考察

A氏は講師となる過程でおもちゃが十分に整ったと実感・認識しており、そのことで子どもとの向き合い方を確立できたと語っている。講師になる前であれば「おうちの中だけで過ごす方法が分からなかった」と語る一方、講師となって迎えたこの期間において、子どもたちが一つの遊びを何日も継続して遊んでいる姿を「遊びの質を深めていた」と捉え、充実したと受け止めている。

B氏は子どもとの触れ合い、遊びが充実したと強く感じていることがうかがえる。子どもと触れ合うにあたって、子どもの遊びの変化に対応して、次の興味と広がりへのきっかけをつくる役割を果たし、結果的に子どもの遊びを展開させることができたとしており、充実感を感じつつ、具体的な遊びの援助を組み立て、実践していたことがうかがえる。B氏は講師活動を始めたことで手に入れた子育てへの自信が充実感に繋がったと語っている。

2人のインタビュー調査で共通してあらわれていることは、不安に対する耐性である。その要因は、子どもと向き合うことに対する自信から生じているものとみられる。その自信を培う上では、おもちゃの使い方のメソッドが大きな役割を果たしていると考えられる。講師をめざして学び、講師として教える立場に立つことで「自分の中で子どもとの向き合い方が確立していたから、迷うことなく、自然とその時間を過ごせていた、向き合うことができていた」などと語る内容が、そのことを裏付けている。

さらに、おもちゃのメソッドが自信を培うのみならず、コロナ禍での遊びの変化に対しても有効に機能しているということが、具体的な事例報告から観察できる。

5. おわりに

本研究では、コロナ禍におけるインストラクターの家庭保育への意識と実態について調査を行った。調査の結果、環境の変化や不安要素が多い中でインストラクターが総じて前向きな意識で、かつ充実した家庭保育に取り組んでいること、その要因としておもちゃの専門知識と講師活動が役立っていることを明らかにした。今後の取り組みとして、インストラクターの地域の育児不安解消に貢献するプロセスなどについても注目していきたい。

【謝辞】

本研究の調査実施にあたって、インストラクターの小林麻以子氏、島袋智子氏にご協力いただきました。ここに感謝の意を表します。